

■ 葦山反射炉を造った男 江川英龍

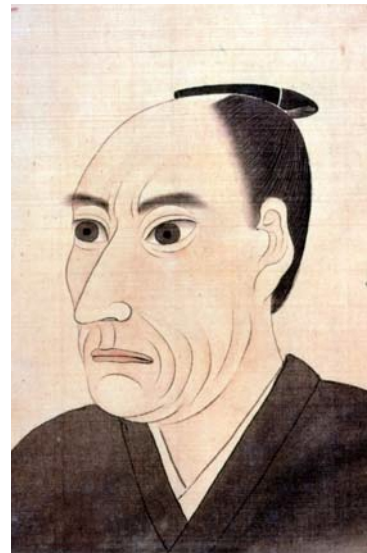
Nirayama Reverberatory Furnaces

■ 江川英龍とは

葦山反射炉の生みの親、江川太郎左衛門英龍(坦庵)。地元では今も親しみを込めて「たんなんさん」と呼ばれている彼は一体、どのような人物なのか。

英龍は、享和元年(1801)、幕府の葦山代官を世襲する江川家に生を受けた。文政7年(1824)から、父英毅の下で代官見習いを務めて経験を積み、天保6年(1835)に江川家第36代当主となるとともに、葦山代官に就任した。葦山代官は、伊豆・駿河・相模・甲斐・武蔵にある幕府直轄地の支配を担当する行政官である。

当時の日本は、全国的な飢饉(天保の飢饉)に見舞われていて、各地で一揆や打ち壊しが頻発していた。また、異国船が相次いで来航し、補給や通商を求めてくるなど、まさに「内憂外患」と言っている状態であった。そのような中で代官となった英龍は、そうした緊急の課題にただちに対処しなければならなかったのである。



伝江川英龍自画像 (公益財団法人江川文庫所蔵)

■ 民政の充実

内政面では、飢饉で疲弊した管轄地の村々を立ち直らせることが急務であった。英龍は自ら率先して質素儉約に努め、部下たちにも勤務精励と徹底した節約を求めた。また、村々を巡回して村役人への説諭と窮民の救済にあたった。

同時に、各地に部下を派遣して実情を調査し、時には「甲州微行図」にあるように自身が現地に足を運び、正確な情報を得ようとする努力を惜しまなかった。加えて、困窮した村に対して長期低金利の貸付金を設定するなど、金融面での対策も積極的に導入している。

そうした様々な努力の結果、葦山代官の管轄地の人々は英龍に心服し、英龍は「世直江川大明神」と称えられるようになった。



甲州微行図 (公益財団法人江川文庫所蔵)

明治日本の産業革命遺産は、23の構成資産全体で「顕著な普遍的価値」を有しており、遺産群として、19世紀半ばから20世紀初頭にかけて重工業(製鉄・製鋼、造船、石炭)分野において急速に産業化した道程を時系列に沿って証言している。

■ 3つの産業分野における時系列に沿った発展

	1850年代	1910年	
段階	試行錯誤の実験 西洋の技術書や西洋船の模倣に基づく封建諸侯や幕府による試行錯誤の実験	西洋技術の直接的導入 西洋技術と外国人技術者の直接的導入	産業化の完成 国内で育成された専門知識と西洋技術の積極的な導入と適応による産業化の完成
製鉄・製鋼	鹿兒島：旧集成館 寺山炭窯跡 関吉の疎水溝 葦山：葦山反射炉 金石：橋野鉄鉱山 萩：萩反射炉 恵美須ヶ鼻造船所跡 大板山たたら製鉄遺跡 萩城下町 松下村塾	八幡：官営八幡製鐵所 遠賀川水源ポンプ室	
造船	鹿兒島：旧集成館 関吉の疎水溝 佐賀：三重津海軍所跡	長崎：三菱長崎造船所第三船渠 ジャイアント・カンチレバークレーン 旧木型場 占勝閣 長崎：小管修船場跡 長崎：旧グラバー住宅	
石炭		長崎：高島炭坑 三池：三角西港 長崎：端島炭坑 三池：三池炭鉱・三池港	



官営八幡製鐵所旧本事務所 (製鉄・製鋼)
※一般には非公開の施設です。
写真提供：日本製鉄㈱八幡製鐵所



恵美須ヶ鼻造船所跡 (造船)



端島炭坑 (石炭)

写真提供：長崎市

顕著な普遍的価値：国家間の境界を超越し、人類全体にとって現代及び将来の世代に共通した重要性を持つような、傑出した文化的な意義及び／又は自然的な価値を意味する。

世界遺産に登録されるためには、世界遺産条約履行のための作業指針において定められている顕著な普遍的価値の評価基準の内、1つ以上を満たす必要がある。